

〔研究ノート〕

「黙して空山に坐せば花、天に墜つ」
— 景鳳「墨竹図」とその画賛について—

やさしい風が竹をゆらしています。よく見ると、二本の竹のうち、上に伸びた一本は全体に風を受けてゆたかに揺れたところ、下の一本は風を受けて大きくたわみ、垂れた頭を元へ戻そうと、しなっているように見えます。竹のしなやかや動きと、風がそれぞれの竹を揺らしながら通り過ぎた一瞬を、墨だけで見事に描ききった作品です。

本作で描かれているのは、このような見えない風の表現であると言えますが、その表現にもう一つ寄与している部分があります。画面上部の賛です。賛は本図の作者・詹景鳳が自ら書したのですが、全体に美しく流れるような行書で書かれ、まるで画面下方の風が、上の画賛の文字をも自在に揺らしているようです。その造形もさることながら、この画賛の内容を読んでみると、本図がより一層深い意味を持っていることに気づかれます。

詹景鳳は安徽省休寧の生まれ、隆慶元年(1567)、科挙の第一関門である郷試に合格し挙人となりますが、その後、中央で行われる第二試験である会試には失敗します。科挙では郷試を突破するだけでも大変なことでしたから、万暦5年(1577)には江西南豊の掌教(教師)として、また同15年(1587)頃より南京翰林院孔目、吏部司務として働き、同23年(1595)に四川保

寧教授、のち通判広西平樂府事にあげられ、同三十年(1602)に逝去します。しかし、何といっても彼がもっとも心血を注いだのは、書画を中心とする古美術の鑑賞でした。王世貞(1526-90)ら一流の收藏家と交友し、項元汴(1525-90)など江南名家所蔵の名画宝跡を博搜してその書画への鑑識を深め、王世貞の『王氏書画苑』を補い、また膨大な書画鑑賞の記録『東図玄覽』を残しています。その内容は驚くばかりで、現代に生きる我々も羨むような眼福の体験をしていることが知られています。

さて、本図はその年紀から万暦19年(1591)3月17日に描かれたものです。その賛は次のように読めます。

「見如丈、別來四年便已成佛，閑結精舍，山中寫此問之並贊俚語。曾入華林幾許年，跣跣認自家禪，聞君說定何說，默坐空山花墮天。萬曆辛卯三月之十七日長髯大士詹景鳳於留銓敬識。」

賛には親しい友人との会話が書き留められています。すでに別れて四年、友人は山中で仏道に親しむ生活を送っているようです。詹景鳳は問います、その悟り得たところを教えてください。友人はこう答えました、「黙して空山に坐せば花、天に墜つ」。

「空山」は静かな山のことで、四年も山中にこもれば、何かしら得

るところがあるのでしょう。それは難解な言語で表現されるものかもしれませんが。しかし友人の答えは、ただ、花は天から降ってくる、これが真理だ、というものでした。花はいづれ散ります。当然のことです。それは花の命が尽きたときかもしれませんし、一陣の風が吹いたときかもしれません。しかしその坦々としたあたりまえの日常こそが真理そのものなのだった、友人は言うわけです。

この賛を読んでから今一度画に向かい合う時、竹が風を受けて揺れているのも、決して偶然ではないことに驚かされます。風が吹けば竹は揺れます。これが友人の見た真実の世界の姿でした。詹景鳳はまず観者に竹の姿を見せ、賛を読ませたあとで再び竹の姿に向き合う時、竹は新たな姿を以て立ち現れ、事に気がついていたのでしょう。賛に記された友人との会話もまるで詹景鳳と鑑賞者の会話のようにも見えます。

詹景鳳は墨竹を愛し、『朱臥庵藏書画目』には『墨竹譜』十四頁があったことが記されていますが、現在上海博物館に蔵される詹景鳳『竹譜図』(図2)との関係は今後慎重に考察されなければいけません。また、『明画録』巻七には「草書に工にして、変化百出、即ちその書法は墨竹を写し、一竿直上、瘦勁絶倫なり。」と、草書の法と墨竹の細いけれども力強い墨線に共通するところがあったことを述べています。万暦25年(1579)の草書の代表作「王建宮詞等草書冊」(北京・故宫博物院、図3)と本図とは、その結字や布置、やや堅い筆で削るようにすすむ筆法が共通しますから、やはりこの頃、六十才

代の作品と考えてよいでしょう。本作は、幕末、山口出身の書家・杉聴雨(1835-1920)「壬子(明治45年[1912])」と、京都の南画壇の重鎮であった田近竹邨(1864-1923)「甲寅(大正3年[1914])」の箱書き(図4)、江上瓊山(1861-1924)の添状を持ち、当時から名家の間で鑑賞されていたことが知られます。流麗な墨線が書になると同時に竹に変化し、また賛によって見るものの形に新たな命が与えられる、中国絵画の名作の一つです。(図2は『中国古代書画図目』三、図3は『中国書法全集』60、榮宝齋、から複写させていただきました)。(学芸部 塚本磨充)

図1 墨竹図

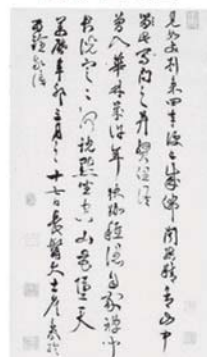


図2 墨竹図冊



図3 王建宮詞

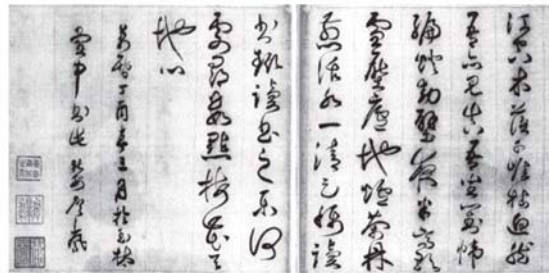


図4

